

早稲田大学大学院文学研究科
博士学位申請論文審査報告要旨

申請者氏名	峯尾 幸之介
学位の種類	博士(文学)
論文題目	モーリッツ・ガイガーの現象学と美学
審査要旨	
<p>本論文は、初期現象学派の代表的な哲学者であるモーリッツ・ガイガー (Moritz Geiger) の思想を、「直接的態度の現象学」という一貫した理論的・方法的概念の分析を基軸に論じたものであり、そのことをつうじて美的価値論がどのように構想されたかを独自に主題化したものである。これまで日本における当該研究領域にあつては、ガイガーの美学思想に限定して、ごく一般的な紹介がなされるにとどまっていたが、峯尾氏は、ガイガーを20世紀初頭の現象学運動のなかに位置づけ、美的価値論や美的経験論をささえている源泉にまでさかのぼって探求しており、その意味で、これまでにない本格的な研究とみなすことができる。しかも、ガイガーをはじめとする初期現象学派の哲学を再検討する試みは、主観主義的な問題構制を転回して実在論をたてなおそうとする近年の学術的動向に呼応しており、その意味でも本研究の今日的意義は大きいといえる。</p> <p>論文の全体は、大きく第一部「ガイガーの現象学」と第二部「ガイガーの美学」に分けられており、ガイガー固有の現象学研究が、最終的にどのように美学的研究に結実したのかが体系的に議論されている。</p> <p>第1章では、ガイガーの思想を哲学史全体のなかに位置づけるという試みがなされる。とくにマッハの感覚主義的な要素一元論に基づく経験論の立場と対比されることで、感覚にとどまらない多様で豊かな対象領域の客観性を承認するガイガーの立場が浮き彫りにされる。この方向性をガイガーはあくまで現象学として遂行しようとするわけであるが、しかし他方で中期フッサール現象学の超越論的主観性の立場にたいしても、批判をおこない、あくまで「客観への転回」を重視する態度を堅持する。一言でいえばガイガーは、どこまでも「直接的態度の現象学」にとどまるのである。この点が、第2章で主題化され、とくに自然主義的態度との差異を強調することで、直接的態度のもつ意味と射程が明確化される。第3章でも、ひきつづき直接的態度にとっての客観領域に焦点があわせられるが、とくに心理的なものの実在性の例として、「意志」の問題がとりあげられている。つまりここで指摘されるのは、体験としての「意志決定」という出来事と、持続的に存続しつづける意志とを峻別することの意味であり、後者における心理的なものの存在様態こそが、重要であるとされるのである。</p> <p>以上が第一部「ガイガーの現象学」の概略であるが、ここで描きだされた全体像は、おおむね妥当なものと評価できるというのが審査委員の一致した見解であった。ガイガーは1930年代に「直接的態度の現象学」というアイデアを得て、独自にそれを彫琢していくという道を歩んだ。峯尾氏の論文は、その道筋の概要を俯瞰的・体系的に把握し、記述しており、その点では、価値の客観性とその体験の問題など、今日的議論にも接続する論点が適確に提示されているといえる。しかしながら他方において、ガイガーのフッサール理解と批判的観点そのものの正確性にかんして、より中立的な立場からの検討がくわえられておらず、そのためガイガーが展開したとされる現象学的立場の独自性にかんしても、説得力を欠いた一方的主張になっているのではないかと、いう指摘があつた。こうした疑義にたいして峯尾氏の立場は、原則的にガイガーの正当性を弁護し、その主張をかれの哲学に内在的な観点から正確な解釈を提示することで応答しようと試みるものであつた。こうした態度は、限定された個別テーマをあつかう論考の性格上やむをえないものであるとはいえ、いっそう包括的な観点からの検証が今後の課題としてのこされたともいえよう。</p> <p>つぎに第二部においては、ガイガーの美学がとりあげられ、20世紀初頭における現象学的美学のもっとも重要な成果のひとつである所以が明らかにされる。まず第4章では、美学史全体を俯瞰するなかで、プラトンのイデア論をはじめとする絶対主義的立場と、とくに近代の心理学におけるような相対主義的立場とが対比的に示</p>	

され、そのいずれでもない現象学的美学の特性が解明される。つまり自律的な個別具体的な領域としての美的価値を研究対象とする美学を構想することによって、現象学のひとつの応用可能性が追求されたということである。美的価値は実在というより、あくまで「現象」とみなされねばならず、そのような現象の本質を、直観を通じて把握せねばならないというのである。

第5章は、本論全体の中核ともいべき「美的価値」を論じた章であり、直接的態度の現象学にとって、美的価値の客観性がいかに保証されるのかが詳説される。こうした問題は、現象学的な意味における「積極的な価値」の問題と不可分であるが、ガイガーはそれを美学的に、二つの契機、すなわち「生の契機」と「心の契機」に即して分析し、美的価値の内実を確保しようとする。このような美的価値論は、一面において、リップスの心理学的美学を踏襲するものであるが、ガイガーは、リップスの展開した、いわゆる感入理論を批判し、あくまで現象学的に、心の契機としての「感情性格」のあたえられ方の問題として引き受けようとする。さらに、第6章では、この美的価値論を前提とする美的体験の問題が論じられ、具体的にはとくに「美的享受」をめぐる論考がとりあげられている。つまり享受という、あくまで主観的な自己享受を本質とする営みでありながら、価値を把握する適意とともに働くことで、独特な美的享受となりうるということが示されるという点に、ガイガーの美的体験論の意義がみとられる。そしてこのことから、美的享受こそが美的なものの「最終目標」であるとまで語られることになるのである。以上のように峯尾氏の論文は、ガイガーが展開した美的享受論のきわめて錯綜した議論を、明快に整理し、その意義と問題点を浮き彫りにしたといえる。いいかえると、ガイガーの美学をつらぬく客観主義的な立場が、自己享受の内方集中から際だてられ、対象に距離をもって、また「利害関心を離れて」むかう外方集中として強調されることになったのであるが、この観点の重要性を峯尾氏の論文はくりかえし指摘する。そして最終的には美的価値体験の実存的意義へと収斂していくガイガーの議論をたどりつつ、同時にその主張の不十分さをも指摘し、そのことによって今後の新たな美学の可能性を展望することで論文は閉じられている。

さて、以上の峯尾氏のガイガー美学解釈にかんして、20世紀初頭に生きたガイガーの美学上の立場はいかにも古典的理想に準拠したものであり、したがって美学や芸術理論が今日ほらむ諸問題にかんしては無力なのではないか、また峯尾氏の論考は、この点に無自覚なのではないか、といった批判が提起された。たしかにこれらの観点は今後の課題としてのこされるであろうが、しかしガイガーの原理的立場は、現代批判としてうけとめるならば、なお重要な問題提起でありつづけており、この点に峯尾氏の論考の意義は失われまいといえよう。

以上のように本論文にはいくつかの問題点がみいだされたが、丹念にテキスト読解をかさねることによってガイガーというひとりの思想家をトータルにあつかった研究であるという意味では、高く評価できるものである。また、ガイガーの美的価値論と美的体験論を、初期現象学の基礎的議論をつうじて解きあかしたという面においても、十分な成果をあげているとみなすことができる。以上により、本論文は博士学位の授与にふさわしい論文であると判断する。

審査会開催日	2024年 1月 31日
--------	--------------

審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	小林信之	哲学・美学	博士(ヴッパタール大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	鹿島徹	哲学	博士(テュービンゲン大学)
審査委員	岡山大学学術研究院社会文化科学学域・准教授	植村玄輝	哲学	博士(慶應義塾大学)